

10月の技術対策（水稻）

平成16年10月1日

ＪＡきたそらち・ＪＡ北いぶき
空知北部地区農業改良普及センター
雨竜西部地区農業改良普及センター

稲刈りを終え、目標としていた収量・品質・食味値は達成できたでしょうか？
「収量が思うように上がらなかった」「病害虫が発生し、品質を落とした」「タンパク含有率が高くなった」など満足できない場合は、その原因を洗い出し、次年度のに向けた改善策を整理しておきましょう。

平成17年度の水田作りは、秋季における「水田の乾燥化作業」「畦畔の補修」から始まっています。

1 水田を乾そう

(1) 適切な稲ワラ処理

窒素肥沃度の高い水田や透排水性の悪い水田におけるワラの鋤込みは、初期の根の生育を阻害し、生育後半の窒素放出によりタンパク含有率を高めます。そのため、稲わらは極力搬出しましょう。

ただし、地力が低く、透排水性の良い水田では秋鋤込が可能です。(図1)

(2) 表面水の排除

「溝切り」(図2)は、田面の停滞水や翌春の融雪水を排除するための有効な手段です。施工に当たっては、必ず排水口につなぎましょう。

(3) 透排水性の改善

透排水性改善のため、「心土破碎」

(図3)や「モミ殻暗渠」を施工しましょう。特に心土破碎は、毎年実施することが重要です。降雨により地耐力の無くなった水田の場合は、積雪上から施工する「雪上心土破碎」が効果的です。

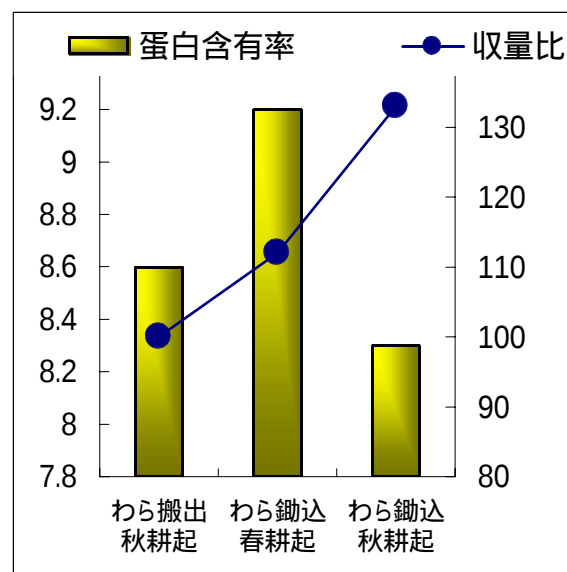


図1 稲わら処理方法・耕起時期と蛋白含有率・収量比(成苗ポット、ほしのゆめ)
(H15 深川市農業センター、排水良好田)

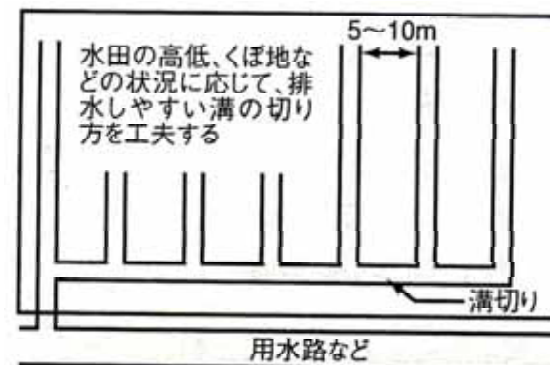


図2 溝切りの施工例

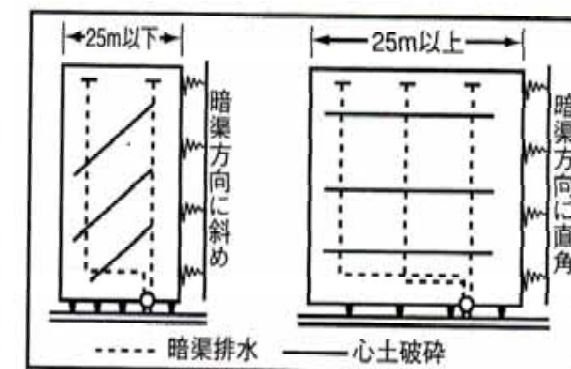


図3 心土破碎の施工例

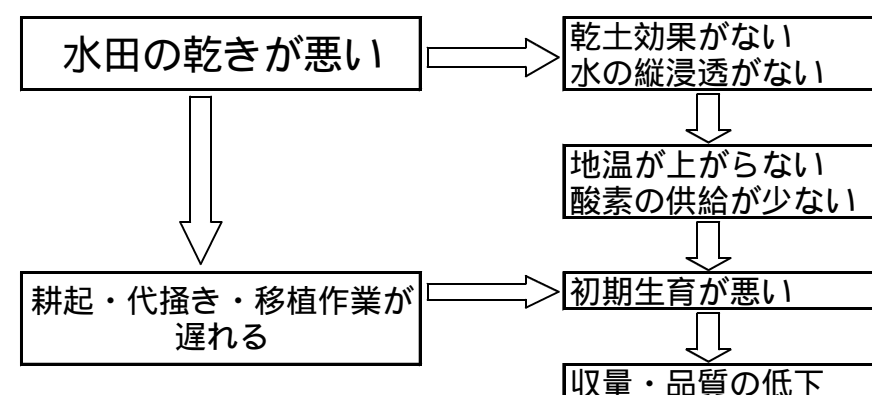


図4 透排水性不良田の問題点

(4) 来年度に向け、畦畔の補修をしよう

「高さが不十分」「漏水している」などの理由で適切な水管理が実施できない水田が散見されます。畔塗り機などを活用し、畦畔の補修を行って下さい。

2 土壌診断を活用しましょう

土壌診断で水田や苗床の化学性をチェックしましょう。特に、本田ではケイ酸含量や培養窒素の診断を活用し、来年の施肥設計に役立てましょう。

透排水性が思うように改善されない場合は、土壌断面調査により原因を確認しましょう。